

<資料>

# 日常に遍在する冒険

——バンクーバー編——

大野哲也

キーワード：冒険, 生き方, バンクーバー

## 1. 自転車旅行のはじまり

1993年5月、僕は荷物を満載した自転車とともに、アメリカ・シアトルのダウンタウンにある安ホテルの前に立っていた。

これから自転車による無期限世界一周の旅が始まるのだ。

僕は、都合6年間在籍した中学校の教員を辞めたことで地道で安定した、しかしともすれば平凡ともいえる生活を営む権利は失った。だが、そのかわりに、完全な自由を手に入れた。今からは、誰かから指示や命令を受けることはない。すべての選択権を手に入れた僕による、僕だけの人生が始まるのだ。そう思うと、底抜けの解放感が胸にこみ上げてきた。

しかしこの解放感と相反するように、そして矛盾しているのだが、これから始まる「僕がやりたかった」はずの自転車一人旅にはまったく気乗りしなかった。旅に対する期待に胸が高鳴るといよりは、億劫な気持ちが僕の胸のほとんどすべての容積を占めていた。すばらしい自然を目の当たりにすること、面白い文化を経験すること、そして想像もしないような生き方をして

いる人たちに出会うことへの期待と高揚感はもちろんあった。だが、「旅に出る」こと自体に、漠然とした面倒臭さを感じたのである。

とりあえずやってきたシアトルという地に大きな意味があったわけではない。手始めにアメリカ大陸を横断しようと思った僕が見つけた一番安い航空券がたまたまシアトル行きだった、というだけだ。

重たい荷物を積んでも耐えられるように各部分を補強したので、自転車本体の重量は約20キロになった。それにテント、食料、衣類、自転車の予備パーツなどを合わせると総重量は50キロをオーバーした。ただ、そのなかに地図やガイドブックの類はいっさい入っていなかった。

せつかく仕事を辞めて完全自由の身になったのだから、ナニモノにも自分の行動を束縛、拘束、規定されたくはないというのがその理由だった。誰が書いたのかもわからないガイドブックや、先の見通しがわかってしまう地図なんかは僕の未来を誘導されるなんてまっぴらごめんだ。僕が向かう場所は僕が決めるのだ。何のしがらみもない自由を手に入れた僕はそれを謳歌しながら、当面の目的地であるカナダ・バンクーバーを目指すことにした。

アメリカ・シアトルの北に位置するバンクーバーは、友人であるマイクさんとドナさん夫婦が住む町だ。「いきなり行って彼らを驚かせてやろう」、僕が旅の手始めにバンクーバーを目指したのは、たったそれだけの理由だった。僕はそんな暢気なことを考えながら、太陽を眺めてどっちが北の方角かを確認して走り出した。

だが、自由気ままな自転車の旅は、はじめから思い通りにはいかなかった。「太陽を見れば自分が今進んでいる方角がわかる。バンクーバーはシアトルの北にあるのだから、北上していればいずれは到着するだろう」とタカをくくってペダルを漕ぎ出したのだが、現実はそのような甘いものではなかった。大都市シアトルには縦横無尽に道路が敷設されていて、バンクーバーへ続く一本道があるわけではないからだ。頻繁に出くわす交差点を、その時の気分で適当に直進したり曲がったりしているうちに、あっという間に迷子に

なってしまった。

「明らかに間違っている」と感じたり、住宅地に迷い込んだり、行き止まりに突き当たると、自分が「ここまでは正しかったはずだ」と確信していた交差点まで戻るのだが、それを繰り返していくうちに、自分の「ここまでは正しかったはずだ」という確信そのものが揺らぎ、にっちもさっちもいなくなってしまう。

方向感覚を完全に失ってどうにもならなくなった僕が、なんの変哲もない交差点でただひたすら呆然と佇んでいると、それを見かねた近所のおばさんが親切心からだろう、「あなたは自分が今どこにいるのかわかっているの?」と不思議そうに尋ねてきてくれた。おばさんの気遣いに、僕は見栄を張って「うん、たぶんね」と答えた。なぜだかわからないが、正直に、おばさんに道を聞く気にはなれなかった。

頭上からは太陽が、5月とは思えないほど強い日差しと熱を容赦なく放射している。僕の皮膚は表面から大粒の汗を噴き出しながら、みるみるうちに白から赤へとひりひりした痛みとともに変色していった。

そんなこんなを繰り返しているうちに、不思議なもので、3日かかって、なんとかカナダに入国し、バンクーバーの手前までやってくることができた。あとは、目の前にある大きな橋を渡れば、そこがバンクーバーだ。

だが……。意気揚々とペダルを回しているうちに、いつしか自動車専用道路に迷い込んでしまった。あまりにも交通量が多いので、もう引き返すことはできない。そう諦めた僕はそのままだ突猛進するべく、立ち漕ぎをして力いっぱいペダルを踏みつけた。

そんな僕に対して、世間の常識は容赦なかった。追い抜いていくドライバーが律儀にも全員「歩道を通れ、バカヤロー」「お前、アホか」「轢かれて死ぬぞ」などの罵声を浴びせるのである。烈火の如く怒りに燃えた形相の連続に、故意と悪意によって本当に轢かれてしまう恐怖を感じた僕は、アドレナリン全開で橋の急勾配を必死になって駆け上がった。

全身から冷や汗を噴出させながらなんとか橋を通過したあと、バンクーバー市内で再び迷子になりながら、ようやくお目当てのストリートを見つけ出し、マイクさん宅に転がり込むように到着することができた。

「いきなり行って彼らを驚かせてやろう」という当初のもくろみは、違うカタチで成就された。重度の日焼けでパンパンに腫れ上がった僕の体を一目見た彼らは「これはたいへんだ」と目をまんまるにしなが、久しぶりの挨拶もそっちのけで、薬局まで、やけど用のローションを慌てて買いに走ったのである。

## 2. マイクさん一家との出会い

僕とマイクさん一家との出会いは、1984年3月に遡る。当時、僕は大学を卒業したばかりで、住所不定無職になりたてのほやほやだった。

僕は大学在学中にまったく就職活動をしなかった。子どもの頃から抱き続けていたプロ野球選手になるという人生最大の夢は儚く砕け散っていた。そんな僕が、プロ野球選手の次に思いついた第二希望、それがアメリカで暮らすことだった。なぜアメリカだったのか、今となっては、その理由は思い出せない。日本で働き蜂になって生活することは嫌でたまらなかった。だがアメリカだったら、もう少し自由に、自分なりの人生を歩んでいけるのではないかと思ったのだろう。二人いる叔父のそれぞれが、日本企業の駐在員としてニューヨークで長く暮らしていて、向こうの生活を時々小耳に挟んでいたことが、僕にアメリカへの憧れを抱かせたのかもしれない。

アメリカで暮らす叔父の一人に相談したところ「いいよ、おいで」と快諾してもらった僕は、ニューヨークに渡る準備をすすめていたところだった。そういう経緯で、一番時間をもてあましてるのが僕だったのだろう、ある日、友人の一人が面白そうな話を持ってきた。「学生時代にホームステイをさせてもらったカナダ人一家が近々高知に遊びにくる。車でいろいろな場所に案内したいので、10日間ほど運転手をやってくれないか」。

いい暇つぶしになると思った僕がその役目を引き受けて、出会ったのがマイクさんとドナさんと一人息子の中学生クリスだったのである。

生まれて初めて「外国人と交遊する」ことは、とても面白かった。僕のたどたどしい英語が、彼らに通じることが嬉しかった。また、彼らと一緒に食事をしたり車に乗って移動するという「ありふれた」行動がとても新鮮に感じられた。彼らは、たとえ家族同士の会話であっても、僕が疎外感を抱くことがないように、僕にも理解できる単語とスピードで、僕が会話に参加できるように配慮してくれていた。そういう気遣いがとてもありがたかったし、彼らが作り出すアットホームな雰囲気心地よかった。

ただ、その一方で、彼らの行動は僕にとっては不思議なことが多かった。一番理解できなかったのは、たとえ大雨が降ったとしても彼ら（特にマイクさんとクリス）が傘をささないことだった。傘を手渡すと「いや、要らない」と頑に拒否する。どうしてか理由を聞くと、「濡れてもすぐに乾くし、だいたい面倒くさい」と答える。小雨ならばともかく、大雨でも決して傘を持つとしない親子の傘嫌いは徹底していた。冬が明けたばかりでまだ底冷えする季節にずぶ濡れになることをいっさい厭わず、それよりも傘をさすほうが面倒くさいという彼らの心性が僕にはさっぱりわからなかった。

また四国内の観光地に行くよりも、友人の家でカードゲームやバックギャモンやジグソーパズルをして遊ぶほうが良いという彼らの志向も理解しがたかった。マイクさんは、「プラモデル屋に行きたい」と毎日のように言う。三人は高知に来る前は東京と大阪に滞在しており、そのときに、高知のような田舎の品薄店よりももっと充実したプラモデル屋にさんざん入り浸っていたはずなのに、である。

マイクさんとクリスの希望を叶えるべく三畳ほどの古くて小さなプラモデル屋に連れて行くと「ここが高知で一番好きな場所なんだ」と言ったあと、上機嫌で「ヘンナガイジン」と日本語で繰り返しながら長時間居続ける。彼らが満足すればそれがなによりなのだが、いろいろプランを練っていたこち

らの意向が空回りしている感じは拭えなかった。

ただ、僕が彼らに会った1984年は、彼らにとって4年連続4回目の高知訪問でもあった。したがって四国内の大方の観光地は制覇していたから、観光に対する満足感が彼らのなかにはすでにあったのかもしれない。

「今日はどうする？何がしたい？」と聞くと、決まってドナさんは「家で遊ぼうか」とこちらの同意を求めるように言う。一方、マイクさんとクリスは、判で押したように「プラモデル屋に行こう」と言うので、「今日はどうする？何がしたい？」という質問をするのは数日でやめた。その日のプランはこちらで決めておいて、「こういう予定を立てたのだけど、どう思う？」という言い方に変えたのである。せつかくはるばるカナダから高知に来ているのだから、行ける範囲の地域文化を味わってもらいたいと思った。ただ、言い方を変えても結果は同じで、ほとんど毎日、僕は彼らとゲームをやり続けた（それはそれで面白かった）。

1984年以降も、彼らは毎年のように日本に来た。かつてホームステイで世話をした学生が住む東京、大阪、高知を約1ヶ月かけて周遊してカナダに戻るといふ旅行を毎年律儀に繰り返した。

一方、僕は、叔父を頼ってニューヨークに渡ったものの、アメリカで職を得るといふ第二希望も結局叶えることができなかった。皿洗いや清掃という仕事はみつかったのだが、なぜだか、それらの仕事には食指が動かなかった。「行けば、仕事もビザもなんとかなるだろう」といふ考えが甘すぎたことは頭で重々理解してはいたが、僕は大きな失意のうちに半年間の漫遊を経て日本に戻ってきた。そして高校時代を過ごした高知県で、先輩宅で居候をしながら、朝から晩までパチンコ屋に入り浸り続けるという怠惰な生活を始めた。

約1年間のパチンコ生活のあと、数ヶ月の古紙回収業を経て、僕は、「中学校の体育の教員になる」といふ人生の第三希望をようやく見つけ出すことができた。そして臨んだ教員採用試験に幸運にも合格することができ、高知

県の山奥にある全校生徒 11 名という小さな中学校の教員になった。勤務先は高知市からだいぶ離れていたが、マイクさん一家が日本に来たときは仕事の合間を縫って運転手をつとめた。

毎年遊びにくる彼らといろいろな会話をしているうちに、なぜ毎年家族 3 人で 1 ヶ月もの間日本に遊びにくることができるのか、そのリッチな謎が解き明かされた。

マイクさんは、バンクーバーにあるヘリコプターの製造・販売を手がける会社で働いていた。この会社はアジア各国にヘリコプターを輸出しており、部品などを配送するために日本の航空会社と委託契約をしていた。なぜ日本の航空会社だったのかというと、当時は、唯一その航空会社だけがバンクーバーからアジアへの直行便を運行していたからだ。

マイクさんが勤めていた会社では、福利厚生の一環として、社員とその家族はカナダー日本間を一人 99 カナダドル（当時のレートで 1 カナダドルは約 175 円）で往復できるという制度を持っていた。これを利用して、毎年、まとめて休暇をとって、3 人で日本に遊びにきていたのだった。

こうして僕は、彼らのライフスタイルの一端を知ることができたわけだが、それ以外の「深い」話はお互いにはほとんどしなかった。真面目な話をするような雰囲気ではなかったというほうが、言い方としては合っていたのかもしれない。もちろん、それはそうだろう。日々のストレスから解放されて、遥か日本まで遊びにきているのだから、深刻な話などはしたくもないはずだ。

マイクさん一家は、常に冗談を言い合い、ゲラゲラ笑うという明るい一家だった。しかもその冗談というのは言葉遊びが多かった。

たとえばこういう調子だ。

「テツヤ。車に FORD っていうブランドがあるだろう？ 何の略だか知っているかい？ Fix Or Repair Daily（毎日修理してばかり）の略なんだ」

### 3. 2016年3月カナダ・バンクーバー

僕がマイクさんの家を再訪したのは2016年、自転車旅行で初めて訪問してから23年が経っていた。だが、彼らの軽妙洒脱なコミュニケーションは健在だった。

マイクさんの自宅近くには「Callingwood Street」という名の通りがある。そこを通るたびに彼はくすくす笑いながら「いったいどんな木が“呼んでる”んだ？（What kind of wood is “calling”?）」と冗談を飛ばしていた。僕が滞在していた時、この通りを3度通ったのだが、そのうち2回、独り言のように喋り、一人で笑っていた。お気に入りの冗談にちががなく、おそらく、僕という同乗者がいないときもこのフレーズを口ずさんでいるのだろう。

また、北米では、まるで電車のように2両連結されたバスが多く走っている。そのバスを見るとマイクさんは必ず「曲がるバス！（Bending Bus!）」と歓声を上げる。最初に「曲がるバス」と聞いたときには「ほほー。今まで知らなかったけれど、このバスの正式名称はそうなのか。ユーモアのある名前だな」と納得しかけたのだが、瞬時に「いやいや、マイクさんが言うことだから当てにはならないぞ」と思い直した。

念のためにドナさんに確認してみると、やはり僕が疑ったとおりで、『曲がるバス』ではないことは確か。正式名称は『延長バス（Extended Bus）』か『連結バス（Articulated Bus）』だと思う。マイク（Mike）が話しているのは『イングリッシュ（English）』じゃなくて『ミクリッシュ（Miklish）』だから真に受けてはだめよ」と途中までは真面目に、最後には、ケラケラ笑いながら落ちをつけて説明してくれた。

ともあれ、“Callingwood”も、“Bending Bus”も、“FORD”と同様、お気に入りのジョークに違いない。きっと死ぬまで言い続けるはずだ。

今回、マイクさんに「ライフヒストリーを聞きたいのだけど？」と尋ねる



と「もちろんかまわないけど、僕の人生なんか3分もあれば全部しゃべれるよ。だって何もないんだから」と言ってハハハと笑った。

こうして聞き取りが始まった。

マイクさんは1943年にイギリスで生まれた。その3年後、両親は一人息子のマイクさんを連れてカナダ・バンクーバーに移住した。父親は、バンクーバーで軍関係の仕事をしていたそうだ。

マイクさんは高校を卒業して自動車会社に就職した（残念ながらFORDではなくクライスラー）。幼少期のことを聞くと、

マイク：イギリス時代の記憶はまったく無いよ。

大野：では、小さいときはどんな子どもだったの？

マイク：普通だなあ。

大野：じゃあ、なんか思い出やエピソードはある？

マイク：いいや、特に何もないよ。

とにかく何を聞いてもこんな調子で、いろいろな角度から質問をしても、箸にも棒にもかからない。

ともあれ、自動車会社ではパーツ部門で15年間働いた。その後、転職した先がヘリコプター会社で、ここではパーツ部門と配送部門に配属され25年勤め上げた。

いつも多機能コンパクト万能工具を持ち歩き、プラモデルや車やバイクをいじるというような細かい作業が大好きなマイクさんにとって、自動車会社やヘリコプター会社で大好きな「部品」に囲まれながら働くことは、趣味と実益を兼ねた「いい職場」だったのだろう。

マイクさんには出世欲がまったくなかった。事実、役職や給料という意味で、大きな出世はしなかった。その一方で、立身出世という夢を見ないことで、仕事上での、厄介な人間関係に苛まれることも、巻き込まれることも、

そして大きな挫折や絶望を味わうこともなかった。また、他人を批判したり、他人に嫉妬したり、他人を羨むこともしなくてすんだ。昇格や昇給という欲望を完全に断ち切ることはできなかったかもしれないが、彼なりに、そういうものから距離をおくことで、心の平安を手に入れた。

その対価として、自分が興味関心を抱く、木工作業やラジコン遊びに熱中することができた。言葉遊びをして周囲を笑わせるというような、日々の生活の身の回りにある「小さな幸福」を発見・創造し、その日その瞬間を楽しむことに人生の面白さを見いだしていった。

マイクさんは、そういう意味では唯我独尊を貫いていた。そもそも、僕はマイクさんが他人について話しているのを聞いたことがない。もちろん、「孫娘のパートナーはとてもいい人だ」くらいの話はするが、身内や友人を超える範囲の「他人」にはほとんど関心がないように、僕にはみえる。

マイクさん宅で泊まったときには、YouTubeの「おバカな運転手たち(stupid drivers)」にハマっていて、深夜のリビングでタブレットを見ながら、一人大笑いをしていた姿が印象的だった。いかにもマイクさんらしいと思った。

一方、ドナさんは1943年にバンクーバーで生まれた。地元の高校を卒業した後、バンクーバーにあるブリティッシュコロンビア大学に進学した。大学では数学と物理を専攻していて、卒業後は学校の教員になりたいと思っていた。

「だけど、勉強しているうちにとても疲れてしまって、教員になる気がまったくなくなったの。それで卒業したら木材会社に就職して経理部で42年働いたわ」

僕は、ドナさんを「とても賢い人」だと思っている。とにかく頭の回転が速いのだ。たとえば会話をすると、僕の英会話力を瞬時に見抜き、僕の能力

に見合ったスピード、単語、文章（の長さ）で話をしてくれる。マイクさんにもそのような洞察力はあるが、それでもマイクさんは、こちらが理解しているがいまいが、自分が話したいように話すという面がある。だから、「細かい揚げ足取り」の冗談を言って、僕が理解できないことも多い。

そういう時は、ドナさんが瞬時にそれを察知して、僕にでもわかる別の言い方で、なおかつ面白さが伝わるように翻訳してくれる。

2016年2月に僕がバンクーバーに行ったときには、膨大な量のバンクーバーの観光パンフレットを事前に用意して、僕の滞在中の毎日のスケジュールを組んでくれていた。僕は、ドナさんの指示通りに動けばいいだけだったので、時間のロスもなく充実した日々を過ごすことができた。

ドナさんは読書やカードゲームが好きなインドア派だ。なかでも一番のお気に入りにはジグソーパズルである。彼らの家の地下室には、これまで完成させてきたジグソーパズルの箱が山のように積まれてある。ドナさんもマイクさんと同様「細かいことを組み立てていく」作業が性に合っているようだ。

そんな二人は1963年、ある友人が企画したホームパーティーで知り合った。15人程度の若者が集まったパーティーで、二人はすぐに意気投合した。その2年後の1965年に結婚し、3年後の1968年に一人息子のクリスが生まれた。

彼らが日本人留学生のホストファミリーになったのは1977年のことである。新聞で偶然見つけた「日本人留学生のホストファミリー募集」という広告がきっかけだった。

それから1991年までのあいだに18~20歳の女子17名と男子1名を受け入れた。学生たちは毎年3月か8月のどちらかに、3週間の予定で来ていたそうだった。

91年が最後の受け入れになったのは、当該留学プログラムが「危険だから」という理由でバンクーバーから撤退したからだ。僕はバンクーバーが危険だとは一度も感じたことがないので、この理由はとても意外だった。

ドナさんに尋ねてみると、「ここが危険だとしたら、いったい他のどこの都市で留学プログラムができるのかなあ。だから危険だから撤退するという説明はあったけど、本当は、何か別の問題が起こったんじゃないかって思ってる」と言っていた。

「学生たちは、一人で滞在することもあったけど、二人を同時に受け入れたこともあったわ。一人より二人の方が彼らにとっては良いみたい。一人だと、私たち家族から逃げようがないでしょう。だからそれがストレスになっちゃう。二人いれば日本語で会話できるからそれがガス抜きになるのよ。学生を受け入れるうえで気をつけていたことは、ゆっくり話すこと、短いセンテンスで話すこと、そして婉曲な表現を避けて直接的に話すこと、この3つ。彼らは日に日に英語が上達していくので、それに合わせて話すようにしていた。

ホストファミリーに応募したのは、毎年いろいろな子がやってきたら、楽しいに違いないと思ったから。実際、楽しかったしね。ホストファミリーになっても金儲けにはならないわ。だってわずかな額が食費として出るだけだから。そもそも、電気代や水道代やガソリン代はこちらの持ち出しだからお金のことだけを言ったら赤字よ。だけどそんなこと全然関係ないわ。だって私たちも楽しんできたんだから」

彼らのホストファミリーの経験を聞いて、僕ははっきりその経験があったから日本に興味を持ち、日本に遊びにくるようになったのかと思った。しかしドナさんの言葉は、僕の予想とは異なっていた。

「これまで日本には11回行ったかな。最後は2009年だったっけ。行くのは3月か11月に、約1ヶ月間。マイクが勤めた会社に日本に安く行ける福利厚生制度があったから行っただけで、日本の文化や社会に興味があったわけ

じゃない。日本人留学生を受け入れたのも、たまたま見つけた留学プログラムのホストファミリーの広告が日本人学生だっただけで、私たちが、あえて日本人を選んだわけじゃない。南米でもアフリカでもヨーロッパでも、どの学生でも良かったの。だから、日本人留学生を受け入れて日本に興味をわき、日本に行きたくなったわけじゃない。また、日本に行けるから、たとえば日本語に慣れるためというような目的があって、日本人留学生を受け入れたわけでもない。たまたま、偶然よ。二つはまったく別のことで、これはこれ、それはそれよ」

彼らは、日本人留学生を受け入れることと、日本に遊びに来ることを関連づけては考えていなかった。この言葉を聞いたときには意外な感じを受けたのだが、のちのち、彼らがなぜ両者を関連づけないのか、僕なりに理解できるようになった。

ともあれ、ホストファミリーになることは楽しかったに間違いないだろうが、まったく問題がなかったかといえばそんなことはない。

「ある年、深夜に電話がかかってきたのよ。その日はダウンタウンでパーティーがあると聞いていたから帰りが遅くなることはわかっていたんだけど、それにしても遅かった。心配していたら電話がかかってきたの。女の子がオロオロしながら『自分がどこにいるかわからない。帰りたいけどどうしていいかわからない』って言うのは理解できたけど、来たばかりで土地勘がないし、焦って英語がうまくしゃべれないから、私たちも彼女がどこにいるのかわからない。すぐに車でダウンタウンに行行って探して、なんとか見つけることができたわ。他の家でホームステイをしている二人とっしょに私たちが来るのを路上でずっと待っていた。その二人もそれぞれの家に送って行って事なきを得たんで、よかったけど。もしも自分が彼らの親だったら『なんていい加減なプログラムなんだ』とものすごく腹が立ったと思うわ」

一人息子のクリスは高校を卒業するとすぐに結婚してすぐに父親になった。

クリスと初めてあったとき、彼はまだ言動の随所に幼さが残る中学生だった。僕が彼らの運転手をしていたからだろう、クリスは僕を下僕扱いして「僕が言うことにはなんでも『はい、ご主人様』と答えるんだぞ。さもなければ拷問の刑だからな!」というセリフが毎年の恒例であり彼のお気に入りの冗談だった。

クリスが高校3年生になった年には、マイクさんとドナさんは二人だけで日本にやってきた。僕が「今年はクリスは来ないの?」と尋ねると、「彼は結婚するんだ」とマイクさんがさらりと答えた。だが、あまりにもさらりと発せられたその言葉から、クリスの「できちゃった婚」を察した僕は、心の底から驚いた。なにせ、クリスには「無邪気なユーモアを発揮する幼い少年」というイメージしか持っていなかったから。

それと同時に、一人息子が18歳で結婚するという想定外の事態に、「さぞ戸惑い苦悩し葛藤したことだろう」とマイクさんとドナさんの心情を慮った。だが彼らは、もちろん、そんなことはおくびにも出さなかった。そして二人は滞在中にそれ以上のことを話すこともしなかったし、僕も聞かなかった。

現在、クリスはコンピューター・プログラマーとして多忙な毎日を過ごしている。妻アンジェラとのあいだには、長男マイケルと長女ジェニファーがいて、二人にもすでにパートナーがいる。僕が出会った時には3人だった一家は、32年という時を経て8人になっていた。

マイクさん一家は、誰かの誕生日には8人でパイ投げパーティーをやったり、スーパーカーのドライブ体験に応募してランボルギーニに試乗したり、5ピンボリングに行ったり、自宅のガレージを自分たちの手で改築したりして(4ヶ月かかっても、まだ足場が組まれただけで作業は遅々として進まない)、その日その日を楽しく過ごしている。マイクさん宅に集まって、全

員で食事をすることも多いそうだ。

僕の目には、「よけいなことは極力考えない」、「不必要だと思ったらライフスタイルから思い切って削ぎ落とす」、「自分の好きなことに徹する」、そういう生き方を彼らは実践してきたように映る。

いや、というよりも、極力、行為に連続的な意味を持たせないといったほうが、僕の実感にはより近いかもしれない。たとえば僕は、自身の「生き方」に過去、現在、未来という時間軸を設定し、それに関連させながら行為に意味をもたそうとする傾向が強い。「今日、努力するのは将来の目標を達成するためだ」とか、「あのときの経験が今に生きている」という具合に、だ。しかしこの生き方は、努力が必ず報われるわけではないので、挫折がつきものだ。また、行為に連続的な意味を持たすという志向性は、「昨日より今日、今日より明日の自分は、より良くなっているはずだ」という「前進主義」（大野 2012）の肯定にもつながる。そしてこの前進主義は、現代社会における資本主義の精神と親和的だ。受験、就職活動、昇進、結婚というような人生のすべての要素が競争の原理によって駆動されているグローバル資本主義社会において、勝者になるためには、日々の努力によって自己成長を成し遂げていかなければならないからだ。

つまり、僕には、マイクさんらの生き方が、それに対する異議申し立てであるようにみえるのだ。

もちろんこれは表面的なこと、あるいは努力目標で、実際にはさまざまな欲望や嫉妬心などが心中で渦巻いているのかもしれない。きっと大なり小なりそうなのだろう。あるいはクリスがティーンエージで結婚したときも、親として思い悩んだことがあったかもしれない。だが、金銭欲にはきりがない。出世欲や名誉欲にも際限がない。向上心や学習への意欲も同様だ。また結婚も、結局は、当人の意志に帰してしまう。しかし「果てがないから」といってそうした欲望をバカバカしいものとして断ち切ることなど不可能だ。

したがって、私たちは、自分の能力や、自分がおかれた環境や状況を把握

して、どこかでその欲望や葛藤に折り合いをつけ、己の限界と己の人生を  
渋々ながらも認めなければならない。決断のポイントにやってきたならば、  
自己の限界を受け入れなければならない。その上で、それらの欲望や葛藤や  
嫉妬心を抱えながら生きていかなければならない。

だが、マイクさん一家の生き方を見ていると、彼らの「折り合いと見切り」  
のポイントが僕よりもずっと「手前」にあるように思える。

彼らと僕の生き方はまったく違う。僕は、プラモデルにもジグソーパズル  
にも、部品や言葉遊びにも興味はない。普通に考えると、僕たちは「合わない」  
はずなのだが、それでも僕が彼らの生き方に強く惹かれるのは、彼らの  
趣味や性格という表層的な部分ではなくて、彼らの深層にある、僕には真似  
することができない潔さに深く共感しているからだろう。

私たちはどうすれば「満足」することができるだろうか。

僕は二人に尋ねてみた。

「日本人を受け入れて、日本に行って、自分の価値観や人生観が変わったこ  
とはある？」

一瞬間のあと、ドナさんは「そうねえ、具体的にどうとは言えないんだ  
けど、ありきたりだけど世界にはいろいろな文化があり、それを体験するこ  
とによって私たちのモノの見方や考え方が・・・」と話し始めた。

しかし「一瞬間の間」によって、ドナさんが僕の意を汲んで、僕が期待する  
ものを話してくれていることを僕は悟った。彼女は、僕が文化人類学をやっ  
ていて、今回のカナダ訪問と彼らへのインタビューがいずれ公のものとな  
る、ということのを了承してくれていた。また、前日には、三人で、ドナさん  
の母校であるブリティッシュコロンビア大学の文化人類学博物館に行ってきた  
ばかりだった。ドナさんは僕の「文化人類学」という部分に見事なまでに  
波長を合わせ、さりげない態度で僕を気遣いながら「模範解答」をしてくれ



ようとしていた。

ドナさんに対して「申し訳ない」と思った瞬間、ドナさんの言葉をかき消すようにマイクさんが会話に割り込んできた。

「そんなもの、あるわけじゃないか。日本に行ったから、多くの日本人留学生を受け入れたからって考え方や生き方が変わったなんてことは全然ないね。ただ、楽しかったし、楽しみが増えた、それだけさ。

テツヤがこうして何度もバンクーバーに来てくれることもそうだし、カズエの結婚式に呼ばれて東京でスピーチをしたときには面白かったよ。

ほかにも面白エピソードはたくさんあるよ。

若い頃のドナさんは、サラサラのブロンド・ヘアーだった。大阪の下町の美容院に行ったとき、ガイジンの髪を切ったことがそれまでなかったんだらうね、美容師みんながドナさんのまわりに集まって『あーでもない、こーでもない』って言いながらおっかなびっくりで髪を切り始めたんだ。まるで見せ物だったよ。

大阪で阪急電車に乗ったときには、超満員でね。周囲の大人たちに押しつぶされそうになっていた小さな男の子が父親の手と間違っ僕の手を掴んできたんだ。いきなり誰かに手を掴まれたから僕が驚いて下を見たら、その子と目が合った。そしてその子が、自分が握っている僕の手を見て、父親ではなくヘンナガイジンの手を握っていることに気づいてびっくりした。『ギャーッ!』という叫び声が満員の車内に響き渡ったよ。

以前の高知は、今とは違ってガイジンがまだほとんどいなかったから、高校生や中学生が僕たちを見つけると、ニコニコしたり手を振ったりしながら寄ってくるんだ。

そんな楽しいことがたくさんあった。それで今もこうして楽しんでいる。ほんと、それだけさ」

マイクさんの口調は、まるで、「今の行為を過剰に意味づけて過去や未来に関連させない。その場その場を楽しく生きるのだ」という己の生き方を宣言しているようだった。それは、同時に、「前進主義を拒否する」という意思表示のように僕には思えた。

#### 4. 「挑戦しない」という冒険的な生をいきる

誰もが「当たり前」に持っている“前進主義的な理想の自画像”に「挑戦すること」を拒否することによって、どんなに努力してもそこに到達できないという苦悩を、その価値観ごと否定する。そして、日々の小さな幸せを積み重ねていこうとする生き方がここにある。マイクさんとドナさんが実践する生き方は、社会的な尺度でいえば、大きな名誉や金銭的利得を得ることはできないかもしれない。しかし、それらを手に入れようと努力するそのプロセスに意味があるというような前進主義的価値観からは解放されているように思える。

一方その対極には、日々の小さな幸せを諦めて、目指す“前進主義的な理想の自画像”のためにたゆまない努力を続けながら、屈辱やストレスを耐え忍ぶ生き方がある。もしかしたらその忍耐の先に大きな満足が待っているかもしれない。そうしたプロセスの先に、自分だけのゴールテープを切ることができたとしたら、それは素晴らしいことかもしれない。だが、たとえ努力をし続けても“前進主義的な理想の自画像”を現実化できる保証はない。たとえば僕は、幼少の頃から抱き続けていたプロ野球選手になるという夢は叶えることができず、次の目標としたアメリカ生活は挫折し、第三希望の中学校教員という仕事も長続きはしなかった。

愚問ではあるが、幸福度を「幸福から不幸やストレスを引いた量」で表すとしたら、大きな幸福を諦めて日々の小さな幸福に徹底して生きた場合と、日々のストレスに耐え続けその結果として大きな目標を達成した場合と、どちらが高い数値を示すのだろうか。

現代日本社会では、安定志向（従来の価値観）から脱却して自分らしく生きていく人びとの姿が共感を持ってメディアで紹介されることが多い。だが、そのような報道は、かえってそういう生き方を選択する人がマイノリティであることを物語っている。もしもそれが人びとにとって「当たり前」の生き方であれば、報じる意味などないからだ。

マイクさんとドナさんの生き方をみていると、彼ら二人が生きてきた、そしてこれからも歩いていくのであろう生き方は、ともすれば忍耐と努力を美德とし、目標に向かって常に歩み続けることを善とする、現代日本社会で暮らす多くの人びとが共感する道徳観や幸福観に対して、鋭いアンチテーゼとなっていると思えるのである。

## 5. 2018年1月大阪

久しぶりの再会を果たしたわずか2年後の2018年、あれほど元気だったマイクさんが亡くなったという知らせを受けた。あまりにも唐突すぎて、これは英語が正しく読めていないのではないかと自分自身を疑った。しかし何度読んでもそのメールは、そうとしか読めなかった。

ガンが見つかったらしいのだが、そのときにはすでに治療のすべがなかったようだ。眠るようにおだやかに息を引き取ったという。涙に暮れるドナさんからのメールにはこう書かれてあった。

「家の近所にあるディア・レイクを散歩するのがマイクの日課でした。湖畔を歩きながら写真を撮ったり散歩している犬を撫でたりするのが好きでした。彼にはハム無線で知り合った多くの友人がいました。また多くのラジコン・ボートの仲間にも恵まれました。彼はプラモデル作りに夢中でした。最近3Dプリンターがお気に入り、息子や孫たちのためにいろいろなアイテムを作ることに熱中していました。彼の宝物の一つはゴールドウイングというホンダ製の大型バイクで、ツーリングが趣味でした。遠路、ワシントン

DCに旅行したこともありました。彼は日本が大好きでした。特に、ホームステイで知り合った日本の友人を訪ねることを楽しみにしていました。いたずら好きで、一度、浴槽に何時間も隠れて出てこず、『マイクさんが行方不明になった』と皆を大慌てさせたこともありました。バンクーバーで、日本人形をつくる教室に通ったこともありました。イギリスで生まれた彼は4歳の時にカナダにやってきました。そして2006年にヘリコプター会社を退職した後は、ボーイスカウトの活動に熱心に取り組んでいました。古い映画が大好きで、映画については博学でした。曲がった事が大嫌いで、たとえ結婚式というようなめでたい場であっても『だめなものだめ』を貫く人でした」

冒険には「挑戦する」という要素が含まれている。マイクさんが貫いた生き方は、冒険的な要素がないようにいっけん見えるかもしれない。だがそういう見方はおそらく間違っているのだろう。

マイクさんは、「出世したい」とか「経済的に裕福になりたい」というような多くの人が「当たり前」に持っている欲望を断ち切り、自分の身の回りにある「小さな楽しみ」にとことん没頭するという生き方を選んだ。だが、「出世したい」とか「経済的に裕福になりたい」という欲望から逃れる、あるいはそれを断ち切ることは、現代社会においては相当困難だ。なぜなら、これらの欲望は、それを是とする社会システムによって、日々の生活の中から自然に、何度もなんども繰り返して湧き上がってくるからだ。

この厄介な欲望を、毎日根気よく断ち切ることは、難しかったに違いない。つまりマイクさんが実践した「趣味に生きる」という生き方を徹底するためには、強い決意と意思を持って「欲望を断ち切ることに挑戦し続ける」ことが必須だった。

そう、マイクさんは己の信念を貫き通して、メインストリームの価値観には迎合しないという大冒険を生き切ったのである。

### 参考文献

大野哲也, 2012, 『旅を生きる人びと バックパッカーの人類学』世界思想社。